

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 4

杉源 銀郎



鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第4回大会

☆開催日	平成21年07月05日		
☆開催場所	様似港～襟裳港		
☆入釣場所	近浦		
☆釣果	アブラコ	414 mm	1/2
	カジカ	396 mm	4/7
	重量	596 g	
☆成績	合計点数	1406 点	
	準優勝		

冒険はせず

タカノハの情報がチラホラと聞こえるようになった。風ならば白里谷あたりで狙ってみたいところだが、嵐氏に聞くと市場に出回り始めてはいるがまだハシリで高値が続いているという。今年は1位、6位、1位と絶好調で、今回の成績次第では年間優勝も狙えることもあり、冒険はせずに近浦方面で釣りをすることにする。近浦は晩秋のカジカ場だが今年の状況から想定するとアブラコは確実に出ると思われる。過去にも7月の大会でカジカとアブラコを揃えて優勝した経験があるのだ。

近浦バス停で阿部長老、大前事務局長と共に下りたが、周辺には釣り人の姿が全くない。彼らは舟揚場付近で荷を下ろしたので私は少し進んで砂利原を掘削した溝で竿を出す。波は穏やかで、いつものようにアカハラ仕掛けを近投、カジカ仕掛けを中投、アブラコ仕掛けを溝の出口のカケアガリ目掛けて遠投する。ゴロの匂いが周辺に漂い始めたと思われる頃、近投したアカハラ仕掛けにアタリが出て30cm級のカジカがあがった。何が来ても最初の1匹は嬉しいものだ。続けて中投したカジカ仕掛けの竿尻がガクンガクンと持ち上がった。40cm弱のカジカがゴロを銜えてあがってきた。そして遠投していた竿にもアブラコ独特のアタリが出て、30cm級のものがカツオを銜えてあがってきた。

皆既日食

天上を仰ぐと雲の隙間から星が瞬いていた。七夕は明後日である。天の川を挟んで織り姫と彦星が1年に1回きりの出会いのために心をときめかしていることだろう。

2009年は世界天文年に定められている。イタリアの科学者、ガリレオ・ガリレイが、望遠鏡を夜空に向け宇宙への扉を開いたのが1609年。それから数えて今年は400年という節目の年になるのだ。そして今年の7月22日には、日本中で日食が観測できると予報されており、一部の地域では国内で46年ぶりの皆既日食を観測できる記念すべき年となっている。日本人宇宙飛行士の若田光一さんが日本人として初めて国際宇宙ステーシ

ョンで長期滞在していることも、今年の大きな話題となっている。

子どもの頃、学校の授業でスライドガラスにロウソクの炎を当てて煤けさせ、そのガラス越しに太陽をみたことがあった。おそらく46年前の皆既日食の時だったのだろう。子どもながらに神秘的な感覚はあったのだが、事前に知らされているから不思議さは残らなかった。予備知識が無ければ太陽が隠れていく様を見て、子ども心にも恐怖を覚えたことだろう。

私は、難題に頭を抱え込み、解決のための展望が開けない時、自分の非力を感じてやるせない気持ちになってしまう。そんな時は、まず自分の足元に目を向けることにしている。そして、この足元に続く広い大地を思い、その先に広がる大海原を考えるのだ。この地球を包み込む大空を見上げて無限に広がる宇宙に思いを馳せる。さらに再び、自分の足元に目をやり考えてみるのだ。すると、自分を支配していた今までのやるせない気持ちが、なんだかちっぽけなものに感じられてくるのだ。

国木田独歩が『牛肉と馬鈴薯』で「宇宙の不思議さを知りたいという願ひではない、不思議な宇宙を驚きたいという願ひです」と語っている。人類の誕生するずっと以前から、悠久の時間が創り上げてきた大自然、そして大宇宙。どんなに足掻いても知ることの出来ない宇宙の神秘に脱帽して、快い安堵感に包まれてしまう。

海は、何故私の心を虜にして話さないのだろう。海は「生命の起源」と言われる。釣りをしていて、私の心臓の鼓動のリズムと海の波のリズムが一体となるのを感じて驚いてしまうことがある。釣りをしながらそこに溶け込み癒されている自分に気がつくのだ。

アブラコ採ったぞー

その後、30cmと40cmのカジカを追加して2魚種5匹が揃い、目標としている千点ぐらいにはなった。後は明けてから、頭になるアブラコを狙うだけである。アタリが一段落したところで阿部氏、大前氏の所へ偵察を兼ねて報告に行く。そして自分の釣り場に戻る途中で以前入ったことのある溝を捜す。しかし、古い記憶を頼りに海面に目を凝らすと溝が埋まってしまったためかよく分からない。しかたなく砂利原に昆布が打ち上がっているところに移動して竿を並べた。自宅に戻ってから過去の釣行メモで確認すると「階段に付いたガードレールのポール二つ目のところ」と記入してあったことから考えると溝を外していたように思う。ここではハゴトコしかあがらなかった。

ヘッドランプの明かりを必要としなくなった頃、アブラコを求めて再度移動する。国道にあがると大前、阿部氏もキャスターに荷を積みこんで前方を歩いていた。一緒に歩きながら荷揚げ階段の所で3人とも一服する。私はそこから下りて先に進み土管前の溝に荷物を置いた。長老の阿部氏がいたので階段下の溝を空けたつもりである。しかし、振り返ってみると彼らがいなくなっている。それではと、階段下の溝にもう一度移動し直して竿を出したところで大前氏が戻ってきた。大前氏は阿部氏を先の舟揚場に送ってからやってきたということだ。大前事務局長の仲間を思う気持ちが痛いように伝わってくる。私は竿を

出し始めたところだったので彼には最初に入ろうと思った土管前の溝を推奨する。私にはハゴトコしか来なかったが、大前氏が40cm強のカジカを取り込んだので、勧めた手前何となくホッとする。



出岬にあがってからも岸際の昆布根に向かって打つ。婿のアブラコは昆布のないところに打ち込んでいた25号のレッドカーボンにきた。

アタリが少ないので3本目の竿を取り出し道糸をガイドに通していると竿先が折れていた。私はいまだに安竿しか持っていないのだが、その中でもバランスがよくて飛距離を出すことの出来る一番気に入っている竿だ。いつ折ってしまったのか全く分からない。

6時半、張り出した前方の岩の先に乗れるほど潮が引いたので、2本の竿を担いで移動する。ここでは最後まで粘るつもりなので、再度、アカハラ用にと用意した25号竿を取り出して3本とする。大前氏からは「何本竿持ってきたの」と聞かれる始末である。その25号竿をチョン投げする。それにカジカ40cmが来た。フラシに入れてエンカマに付ける。これからの釣果は少しでも長く生かしておいて身長に提出するつもりだ。

8時、辺り一面濃霧に包まれた。ドライアイスで舞台を演出するがごとく、ひたひたと海面から忍び寄ってくる白い霧で辺りが霞んできて、背後の景色も見えなくなった。岩の上でポツンと一人だけ取り残された世界に浸ると仙人の心持ちになってくる。しかしこれは孤独感というものではない。桃源郷で仙人が竿を出している絵柄があったが、同じよう

に無の境地になっていると、その竿先がグックと入った。30号の竿は昆布根の中を狙って打ち込んでいるのだが、アタリが出ないこともあり昆布根から離して打ち込んでいた25号の竿だ。竿を握りグイッと煽ると、アブラコ独特の深み目指してグングンと突き刺さりながら、40cm強があがった。その途端、風が吹いて濃霧がさーっと流れていって大前氏が見える。仕掛けにぶら下げたまま大前氏に向かって叫ぶ。「アブラコ、とったぞー」これも丁寧にフラシに入れる。

エンルム岬の主

余裕が出てきて、タカノハねらいに切り替えて3本とも遠投にする。それにカジカ40cm級がきた。40cm級のカジカ4本、アブラコ1本を審査用のバケツに入れて片付ける。40cm+40cm+6kgで1400点ぐらいになっただろうか。優勝を狙える点数である。道路上では大前氏と阿部氏が先にあがって待っていてくれた。

審査結果

優 勝	吉井 博	1 6 4 2 点	(アブラコ532mm+アカハラ410mm+7000g)	エンルム
準 優 勝	鹿島釣狂	1 4 0 6 点	(アブラコ414mm+カジカ 396mm+5960g)	近 浦
3 位	西川紘一	9 9 5 点	(アブラコ448mm+カジカ 277mm+2700g)	冬 島
4 位	堀内正博	9 8 3 点	(カジカ 391mm+アブラコ314mm+2780g)	西 山 中
5 位	嵐 光博	9 2 8 点	(カジカ 402mm+アブラコ278mm+2480g)	下 近 浦
身長優勝	前野達志	1 2 3 1 点	(アブラコ473mm+カジカ 370mm+3880g)	こ と に

優勝した吉井氏の釣果はエンルム岬でのものだ。53.2cmのアブラコを頭に50cm級4本、嫁は40cm級のアカハラだった。電話で話したときには「アブラコは4本揃ったが嫁が30cmのアカハラで駄目だ」と言っていたこともあり、私が優勝かもという願いを抱いていたが、その思いは簡単に砕かれてしまった。場所は詳しく聞いているが明かすことが出来ないのは吉井氏のためとしておこう。彼が入らないときには密かに私が使おうと考えているのだが・・・コホン。そのエンルム岬で大物と格闘している夢を見ながらバスの人となった。



第4回大会の入賞者 左から準優勝：鹿島釣狂、優勝：吉井 博、身長優勝：前野達志



本日の全釣果